慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	動詞由来形容詞の派生をめぐる考察 : 接辞-asiと-ableを中心に
Sub Title	A study on deverbal adjectives : Japanese affix -asi and English affix -able
Author	杉岡, 洋子(Sugioka, Yōko)
Publisher	慶應義塾大学言語文化研究所
Publication year	2020
Jtitle	慶應義塾大学言語文化研究所紀要 (Reports of the Keio Institute of Cultural and Linguistic Studies). No.51 (2020. 3) ,p.47- 63
JaLC DOI	10.14991/005.00000051-0047
Abstract	日本語の接辞-asiによる動詞からの形容詞の派生 (e.g.「好む ~ 好ましい」、「うらやむ ~ うらやましい」) を英語の-ableの一部の用法 (e.g. like ~ likeable, envy ~ enviable) と比較しながら、その特徴を観察する。そして、接辞が付くことのできる動詞の特徴と、派生された形容詞の意味に焦点を当てて考察する。
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00069467-00000051-0047

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

動詞由来形容詞の派生をめぐる考察
―接辞 *-asi* と *-able* を中心に―

杉　岡　洋　子

要旨：日本語の接辞 *-asi* による動詞からの形容詞の派生（e.g.「好む～好ましい」,「うらやむ～うらやましい」）を英語の *-able* の一部の用法 (e.g. like~likeable, envy~enviable) と比較しながら，その特徴を観察する。そして，接辞が付くことのできる動詞の特徴と，派生された形容詞の意味に焦点を当てて考察する。

1．はじめに

心的事象の表出をあらわす述語を作る派生接辞「- がる」は，形容詞から動詞を派生するが，これが付加する形容詞には次のような意味制限がある（杉岡2007）。

（1） a. 感情の表現 -- 付加できる（e.g. うれしがる，面白がる）
　　形容詞：恐ろしい，悲しい，うらやましい，苦しい，欲しい
　b. 主観的判断 -- 付加できる（e.g. もったいながる，わずらわしがる）
　　形容詞：書きにくい，頼もしい，悼ましい
　c. 五感を通した感覚 -- ほとんど付加できる（e.g. 寒がる，うるさがる）
　　形容詞：暑い，冷たい，痛い，さわがしい，すっぱい
　d. 客観的性質 -- ほとんど付加しない（e.g. * 小さがる，* 遠がる）
　　形容詞：大きい，薄い，厚い，丸い，長い，黒い，もろい，弱い
　e. 規範的な形容 -- 付加しない（e.g. * 美しがる，* 正しがる）
　　形容詞：悪い，やさしい，清い，かしこい

『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第 51 号（2020）pp.47~63

つまり，「- がる」が付くことができる形容詞は，経験者の感情や心的判断をあらわすものに限られるといえる。たとえば，「ジョンが映画を面白がる」という文は「ジョンが映画を面白いと感じる」という主観的な心的事象を含意している。これに対して，「ジョンが結論を正しいと感じる」は「* ジョンが結論を正しがる」とはいえない。これは，何かが正しいかどうかは主観ではなくある規範にもとづく客観的判断だからだと考えられる。したがって，（1a-c）のようになんらかの主観性を含む形容詞には「- がる」が自然に付加できるが，（1d, e）のように主観性をもたない形容詞には「- がる」は付加できない。

そのような主観性をあらわす形容詞の成り立ちを見ると，次のように動詞語幹を含むものが含まれている。

（2） a. うらやましい urayam-asi-i -- うらやむ

b. 誇らしい　hokor-asi-i -- 誇る

c. 好ましい　konom-asi-i -- 好む

（2）の形容詞は，ある種の心理状態を含意する他動詞の目的語を主語にとり，その心理状態を引き起こすという性質をあらわす（3a）。英語では，接尾辞 *-able* が作る形容詞の一部によく似た統語的および意味的な特徴が観察される（3b）。

（3） a. ジョンが花子の成功をうらやむ→花子の成功が（ジョンに）うらやましい。

b. John envies Hanako’s success. → Hanako’s success is enviable to John.

しかし，英語の接辞 *-able* が付く形容詞の多くは，（3b）のようにそれが引き起こす心理状態にもとづく主語の性質をあらわすのではなく，一般に元の動詞の目的語にあたる主語を対象とする行為の可能性をあらわす。

（4） a. These books are readable by small children.

b. The problem was not solvable by anyone.

（4）の *readable*, *solvable* に対応する日本語は，形容詞ではなく動詞の可能形となる（本が読める，問題が解ける）。

本稿では，日本語の接辞 *-asi* による動詞からの形容詞の派生を英語の

-able の一部の用法（3b）と比較しながら，その特徴を明らかにすることを目的とする。特に，接辞が付くことのできる動詞の特徴と，派生された形容詞の意味に焦点を当てたい。

２．２種類の心理動詞

英語の心理動詞には経験者項（Experiencer）を主語とするもの（5a, 以下「*fear* タイプ」）と目的語とするもの（5b, 以下「*frighten* タイプ」）があることが知られている（Grimshaw 1991, Pesetsky 1995, Landau 2010など）。

（5） a. John fears ghosts.

ex. love, admire, like, envy, deplore, enjoy, pity, regret, respect, tolerate

b. Ghosts frighten John.

ex. surprise, please, amuse, anger, excite, scare, disgust, confuse

これら 2 種類の心理動詞は両方とも他動詞であるが，経験者項ではない項が *fear* タイプでは感情の対象（Theme）[1]であるのに対して，*frighten* タイプでは感情の原因（Cause）であること，また *fear* タイプの動詞は対象に対する経験者の心的態度をあらわし，アスペクトとしては状態（state）であるのに対して，*frighten* タイプは原因による経験者の心的変化をあらわし，到達（achievement）アスペクトをもつ。（5a）と（5b）では語順がちょうど逆になっていることから，統語構造における移動を含むさまざまな分析がなされてきた（Beletti and Rizzi 1988, Landau 2010参照）。

一方，日本語では経験者が主語である心理動詞に，対象を「を」格名詞であらわすタイプと対象（または原因）を「に」格タイプであらわすタイプが観察される（寺村1982, 杉岡1992，坂東・松村2001）。[2]

1　心理動詞がとる経験者ではない方の補語の意味役割について，先行研究では対象（Theme）以外に Target や Subject Matter などさまざまな名称が使われるが（Pesetsky 1995など），ここではその詳細には立ち入らない。

2　（6）に例示するように，心理動詞には和語動詞，漢語動詞（＋する），副詞やオノマトペを含むものなどがあるが，以下では接辞 *-asi* が付加できる心理動詞として，和語動詞を中心に考察を進める。

（6） a. 花子が失敗を恐れた。

悲しむ，楽しむ，喜ぶ，好む，嫌う，うらやむ，ねたむ，疑う，願う，望む，思う，誇る，悔やむ，惜しむ，慕う，恨む，（悩む）

［漢語＋する］心配する，愛する，嫌悪する，尊敬する，熱望する

b. 花子がその知らせに驚いた。

怒る，おびえる，戸惑う，苦しむ，いらだつ，飽きる，困る，悩む，めげる，焦る，うろたえる，わずらう，（悲しむ，喜ぶ）

［漢語＋する］激怒する，感動する，憤慨する，困惑する，失望する，退屈する，安心する，興奮する

［副詞・オノマトペ＋する］びっくりする，イライラする，がっかりする，ハッとする，ホッとする，まごまごする，うんざりする

［慣用表現］目覚める，気づく，腹が立つ

（6a）と（6b）の動詞に共通する特徴としては，主語（基本的に人間に限られる）が何らかの心理や認識（感情，知覚，判断など）を経験するという点であり，その意味役割は「経験者」（Experiencer）だと考えられる。しかし，主語ではない項がとる格助詞と意味役割は（6a）と (6b) で異なっており，それらの主語との関係も同じではない。(6a) では「を」格で標示される直接目的語の「失敗」は「恐れ」という感情の対象であるのに対して，(6b) の「に」格であらわされる「知らせ」は「驚き」を引き起こす原因だといえる。その点で，(6a) は英語の *fear* タイプの動詞 (5a) と近い特徴を示し，(6b) は主語が経験者であるという点は異なるが，原因項をとる *frighten* タイプの動詞（5b）と近い。また，（6）の例でカッコ内に示した動詞（悩む，喜ぶ，悲しむ）は両方の格パタンで使われるが，主語ではない補語の格によって微妙にニュアンスが異なる。例えば，「悩む」は「就職先を悩む」と「を」格目的語をとる場合は，「（対象）についてどうするかを考える」という意味になるが，「人間関係に悩む」とすると「人間関係がうまくいかないことにクヨクヨする」という意味になり，後者の方がより受動的であるといえる。

（6b）の非主語項の意味役割が対象ではなく原因であると考えられる一つの根拠として，これらの動詞の多くにおいて，他動詞形が経験者を目的語と

する英語の *frighten* タイプの動詞とよく似た構文を作ることがあげられる。

（7） a. その知らせが花子を驚かした／怒らした／戸惑わした／困らした／悩ました／わずらわした。（cf. 驚かせた，怒らせた）

b. 彼の言葉が花子をおびえさせた／苦しませた／いらだたせた／飽きさせた。

一般に無生物主語を避ける傾向のある日本語では，（7）はやや不自然に聞こえるが容認される文である。上記 cf. に示すように（7a）の動詞では「驚かす／驚かせる」のように他動詞形（*-as*）と使役形（*-ase*）の両方がほぼ同じ意味で使われる。それに対して，（6a）の対象を目的語とする動詞では，（7a）のような他動詞形は存在せず（# 悔やます，# 誇らす），使役形を使った（7b）と同種の構文はほとんど容認されないものが多い。

（8） a. * 失敗が花子を悔やませた／恐れさせた／嫌わせた。

b. * 友人の成功が花子を疑わせた／うらやませた／ねたませた。

c. * 試験の合格が花子を誇らせた／願わせた／望ませた。

cf. その知らせが花子を喜ばせた／悲しませた。（cf. 喜ばした）

（8cf）のように「喜ぶ」と「悲しむ」はこの構文を許すが，これらの動詞はもともと非主語項を「を」格だけでなく「に」格であらわすことも可能である（その知らせに喜ぶ／悲しむ）ので，cf. の文はそちらがベースになっていると考えられる。

（6b）の動詞の多くが（7）のような他動詞形との交替を示すことは，（6b）の主語は外項ではなく内項であることを示唆している。つまり，（6b）の動詞は「ある原因が経験者に感情や知覚を引き起こす」という事象をあらわしており，それが状態変化の自動詞（e.g.「驚く」）として具現したのが（6b）であり，使役変化の他動詞「驚かす」として具現したのが（7）だと考えられ，（7）と（6b）は「乾く／乾かす，通る／通す」のような非心理動詞に見られる自他交替と並行的だと言える。ただし，普通の状態変化動詞が原因をあらわす付加詞を「で」で標示するのに対して，（6b）の心理動詞がとる原因をあらわす項は内在格「に」をもつと考えられる（杉岡1992）。

（9） 驚く ［経験者（y），原因（に -z）］→ 花子がベルの音に驚く

cf. 乾く［対象（y）］→ 洗濯物が（風で）乾く。

一方，（6a）の動詞は「を」格で標示された目的語をとるので，その主語があらわす経験者は外項だと考えられ，実際に（6a）の動詞の多くは（6b）の動詞とは対照的に受動態であらわれることも可能である（杉岡1992）。

（10）恐れる［経験者（x），対象（y）］

（11）a. ニュースが皆に喜ばれた／悲しまれた。（cf. ?? 戸惑われた，?? 驚かれた）[3]

b. 彼の死が多くの人に惜しまれた／悔やまれた。

c. 先生は学生たちに恐れられた／嫌われた。

次節では，これらの 2 種類の心理動詞の違いを踏まえて，接辞 *-asi* による形容詞の派生の可能性とその形容詞の意味特徴について観察する。

3．動詞由来形容詞を作る接辞 *-asi*

日本語の 2 種類の心理動詞（6ab）は，前節で見た自他交替パタンの違い（能動態／受動態 vs. 状態変化／使役変化）に加えて，（2）で示したような接辞 *-asi* による形容詞の派生についても違いが見られる。すなわち，（6a）の対象を「を」格目的語としてあらわす心理動詞の一部には，対応する形容詞が存在する。

（12）a. 花子が友人をうらやむ。→花子には友人がうらやましい（こと）。[4]

b. 監督が連続優勝を誇る。→監督には連続優勝が誇らしい。

c. 花子が間違いを悔やむ。→花子には間違いが悔しい。

cf.「悔ゆ」（古語）

3 「皆に驚かれた」という表現自体は可能であるが，「ニュースが」という主語を入れると不自然なので，これは自動詞「驚く」をもとにした迷惑受け身だと考えるのが妥当である。

4 日本語の主観的述語は，そのままの形では 3 人称主語が不自然なことが多く，形式名詞「こと」（うらやましいこと）や推量や伝聞の助動詞（うらやましいらしい，うらやましいそうだ）をつけると自然になるが，以下ではそれらを省略して提示する。

d. 私が同僚の出世をねたむ。→私には同僚の出世がねたましい。

e. 子供が雷を恐れる。→子供には雷が恐ろしい。cf.「恐る」（古語）

f. 社長が部下を疑う。→（社長には）部下が疑わしい。

g. 農民が豊作を望む。→（農民には）豊作が望ましい。

h. 患者が早い退院を喜ぶ。→（患者には）早い退院が喜ばしい。

i. 先生は積極的な学生を好む。→（先生には）積極的な学生が好ましい。

これらの例からわかるように，接辞 *-asi* は心理動詞の目的語である対象を主語として取り立てる形で形容詞を作る。これに対して，（6b）の心理動詞では対応する形容詞は限られた例（13cf）を除いて存在しない（# で標示）。

（13）a. 花子がニュースに驚く。→ 花子にはニュースが # 驚かしい。

b. 花子が彼の行為に怒る。→ 花子には彼の行為が # 怒らしい。

c. 戸惑う→#戸惑わしい，困る→#困らしい，飽きる→#飽きらしい，おびえる→ # おびえらしい，めげる→ # めげらしい，焦る→ # 焦らしい

cf. 花子が人間関係に悩む／いらだつ。

→ 花子には人間関係が悩ましい／いらだたしい。

このことから，接辞 *-asi* が動詞に付加する基本的な条件として，外項の存在をあげることができる。つまり，*-asi* が付加することで外項が抑制され，その結果として対象が形容詞の主語となり，派生された形容詞は主語の性質をあらわすと考えることで，（12）と（13）の対比が説明できる。

そもそも，日本語の形容詞の活用語尾には「ク」活用（「高い」，「大きい」）と「シク」活用（「美しい」，「欲しい」）があるが，ここで取り上げる接辞 *-asi* は後者に属する形容詞の語尾である。これら 2 種類の活用語尾をもつ形容詞については国語学における様々な研究があるが，それらの成り立ちを調べた山崎（1992：61）では，「ク」活用の形容詞が状態をあらわすのに対して，「シク」活用の形容詞には情意性が強いという先行研究の主張にもとづき，「動詞から派生したと考えられる形容詞の意味には特に強い情意性が認められる」ことと，その情意性は接辞 *-asi* が担っているとの考察が述べ

られている（外崎2005も参照）。

接辞 *-asi* が情意的な意味を有するという山崎の提案は，派生形容詞がとる項の種類によって，次のように支持することができる。(12) にあげた「うらやましい」や「誇らしい」といった派生形容詞は元の動詞の目的語である感情の対象が主語であるものの，(14b) (15b) のように経験者をあらわす「に」格名詞を省略すると，普通の文脈では経験者が話者であることが含意される。

(14) a. 花子には友人がうらやましい。
　　b. 友人がうらやましい。→ 経験者が私（話者）であることを含意

(15) a. 監督には連続優勝が誇らしい。
　　b. 連続優勝が誇らしい。→ 経験者が私（話者）であることを含意

このことは，接辞 *-asi* で終わる派生形容詞が，主語である対象のみならず経験者を項（あるいは必須の付加詞）としてとることを示唆する。

さらに，「シク」活用をする形容詞には，直接的には感情や知覚をあらわさない動詞と関連づけられる次のような例も存在する。

(16) a. 頼む～頼もしい，なつく～なつかしい，わづらう～わづらわしい，
　　呪う～呪わしい，目覚める～目覚ましい，嗅ぐ～かぐわしい
　　病む ～やましい，睦む～むつましい，似つく～似つかわしい
　　なげく～なげかわしい
　　b. 微笑む～微笑ましい，涙ぐむ～涙ぐましい，勇む～勇ましい，
　　騒ぐ～騒がしい，急ぐ～いそがしい，古めく～古めかしい，
　　輝く～かがやかしい

これらの形容詞は，音韻的にも単なる *-asi* の付加ではないものが含まれる（頼もしい，なげかわしい，似つかわしい）。そして，元の動詞の意味からかなり逸脱したものも多い。たとえば (16a) の二項動詞が基本となっていると思われる例のうち，「頼もしい」は「信頼できる」という感覚をあらわし，「頼む」がもつ主要な意味である「依頼する」から少しはずれているし，「かぐわしい」は対応する動詞の「嗅ぐ」が匂いの種類に対して中立的であるのに対して，「良い匂い」という知覚に限定される。(16b) の自動詞と関係す

ると思われる形容詞の場合は，さらに意味が変化しており，「微笑ましい」は微笑みを喚起する性質の認知をあらわし，「騒がしい」は「騒ぐ」という行為が産出する音の知覚をあらわす。このように，（16）の動詞と形容詞の意味的関係には（12）で見た心理動詞の場合よりも度合いの大きい語彙化が見られる傾向があるが，（16）の形容詞も（12）と同様に感情や知覚といった主観的な意味をもつ形容詞であることに注意したい。すなわち，（12）の心理動詞の場合は，接辞 *-asi* 自体が主観性という意味をもたなくても，それが元の動詞から受け継がれているという可能性もあるが，（16）の形容詞の多くについてはそのように考えることが難しい。したがって，この観察も接辞 *-asi* に主観性という意味特徴があるとする考えを支持するものだといえる。

そこで，接辞 *-asi* は単に形容詞を派生する機能だけではなく，次のように経験者を含む項構造をもつと仮定したい。

（17）-asi［経験者（に -z），対象（y）］+ うらやむ［経験者（x），対象（y）］
→ 花子には友人がうらやましい。

その根拠の一つとして，接辞 *-asi* が作る派生形容詞が接辞 *-gar* によって動詞になれることがあげられる。接辞 *-gar* は 1 節で述べたように感情や主観的判断や感覚をあらわす形容詞にのみ付くことができ，形容詞があらわす感情や知覚を表出するという意味の動詞を作る。

（18）-gar［動作主（x），対象 (y)］+ うらやましい［経験者（に -z），対象（y）］
→ 花子が友人をうらやましがる。

心理動詞「うらやむ」と「うらやましがる」は同じ感情をあらわす動詞であるが，前者はそれを感じるという内的情動をあらわすために主語は経験者であるのに対して，後者はその感情を表出するという外へ向けた行為であり，そのために主語は動作主であるという違いがある。動詞→形容詞→動詞という派生において，動詞「うらやむ」が語幹を共有する「うらやましがる」の派生を阻止するという語彙的ブロッキング（Aronoff 1976）が働かないのはそのためであると考えられる。さらに，（16）で見たように心理動詞ではない動詞に接辞 *-asi* が付く場合は，次のように派生語の主要部である *-asi* の項構造が派生形容詞の項構造に投射される。

（19）a. -asi［経験者（に -z），対象（y）］+ 騒ぐ［動作主（x）］
子供達が騒ぐ → 花子には子供達が騒がしい。
b. -gar［動作主（x），対象（y）］+ 騒がしい［経験者（に -z），対象（y）］
→ 花子が子供達を騒がしがる。

（19）の派生では，元の動詞の動作主の性質が派生形容詞によってあらわされ，それを知覚する経験者も存在するので（19a），やはり *-gar* による動詞の派生が可能である（19b）。この場合は，元の動詞（騒ぐ）と形容詞を経て派生された動詞の主語は異なる。さらに，次の例のように派生形容詞の主語が元の動詞（騒がしがる）の主語に対応しない場合もある。

（20）a. -asi［経験者（に -z），対象（y）］+ 騒ぐ［動作主（x），場所（で -z）］
子供達が教室で騒ぐ。→ 花子には教室が騒がしい。
b. -asi［経験者（に -z），対象（y）］+ 急ぐ［動作主（x），原因（で -z）］
花子が仕事で急ぐ。→ 花子が仕事でいそがしい。
→ 花子には仕事がいそがしい。
cf. 花子が（仕事を）いそがしがる。

（16）の派生形容詞は上でも述べたように動詞から意味が変化していることが多いので，このように規則的な対応が見られないことは不思議ではないが，ここでも派生形容詞が主観性をあらわして接辞 *-gar* の付加が可能であることから，接辞 *-asi* が経験者を項としてとっていると考えられる。

ここまで，接辞 *-asi* が作る形容詞が経験者の項をとることを見てきたが，実はこの点について（12）にあげた心理動詞にもとづく派生形容詞は必ずしも均一ではない。（12a-e）の派生形容詞の場合，経験者の項を「に」格ではなく「が」格であらわすこともまったく不自然ではないが，（12f-i）の形容詞の場合は，それほど自然ではないという違いがある。

（21）a. 花子が友人がうらやましい／誇らしい／ねたましい／恐ろしい（こと）
b. ?花子がそのことが疑わしい／望ましい／好ましい／喜ばしい（こと）

このことは，上で派生形容詞に経験者の項が存在することの証拠としてあげた接辞 *-gar* の付加の可能性とも連動しているようである。すでにその一部

について見たように（12a-e）の形容詞に *-gar* を付けることは問題ないが（うらやましがる，誇らしがる，恐ろしがる，悔しがる），（12f-i）の形容詞は *-gar* を付けるとかなり不自然になるか容認不可である。

（22）?? 花子がそのことを疑わしがる／望ましがる／好ましがる／喜ばしがる

この違いは何によるのであろうか。これらの 2 種類の派生形容詞の元の動詞を見ると，（12a-e）はより直接的な感情（妬み，誇り，恐れ）をあらわすのに対して，（12f-i）は感情という側面も否定はできないが，心的判断とでもいうような知覚（疑い，望み，好み，喜び）が加わっているといえるかもしれない。この点は次節の英語の *-able* の意味とも関係するのでそこでさらに考えたいが，接辞 *-asi* が経験者の存在を含意することは確かであるとしても，主観性がより明確な場合とそうではない場合があるといえるだろう。

4．英語の形容詞派生接辞 *-able* との比較

英語には動詞に付加して形容詞を派生する次のような接辞がある。

（23）a. -able : drinkable, readable, admirable
b. -ing: interesting, disgusting, demanding
c. -ed: satisfied, justified, determined
d. -ive: oppressive, active, supportive
e. -ant/ent: observant, dependent, resistant

これらの中で心理動詞に付けるのは（23a-c）であるが，心理動詞の目的語を主語に取り立てるという接辞 *-asi* と共通した性質をもつのは（23a）の *-able* である。接辞 *-able* はラテン語由来の生産的な接辞で，英語以外のヨーロッパ言語のよく似た機能をもつ接辞，イタリア語 *-bile*（Bisetto 2009），ブラジル系ポルトガル語 *-vel*（Moreira 2014），スペイン語 *-ble*（Oltra-Massuet 2013），ギリシャ語 *-tos*（Alexiadou 2018），オランダ語 *-bar*（Booij 2017），ドイツ語 *-bar*（Riehemann 1998）などについても，英語の *-able* との比較も含めて研究されてきた。以下ではこれら諸言語についての研究が示す知見も交

えて考察していく。

英語の接辞 *-able* の中心的な働きは，Aronoff（1976）など多くの研究が指摘するように，他動詞に付加してその目的語の性質をあらわす形容詞を派生することで，この用法での接辞 *-able* は非常に生産的である。

（24）a. This table is movable. = This table can be moved.

b. This garbage is burnable. = This garbage can be burned.

さらに，状態変化をあらわす自動詞にも *-able* は付加することができる。

（25）a. This object is breakable. = This object can/may break.

b. The weather is changeable. = The weather can/may change.

これらの *-able* 形容詞は，主語である対象の性質を動詞があらわす事象が起こる可能性にもとづいて述べている（*movable*「動かせる」，*breakable*「壊れる／壊れやすい」）。

この *-able* 形容詞があらわす「可能性」は次の例文の対比に見られるように，客観的な事実に加えて，ある種の価値判断につながる場合もある。

（26）a. a supply of drinkable water

b. a very drinkable red wine

（27）a. a readable interface

b. a readable book　　（Moreira 2014: 193）

（26a）と（27a）の *drinkable* と *readable* は，ある客観的な基準にもとづいて水が「飲める（摂取可能）」，あるいは境界線が「読める（判別可能）」という意味をもつ。一方，（26b）と（27b）は，「飲みやすい（美味しい）ワイン」，「読みやすい（面白い）本」という主観的な価値判断をあらわすので，ここでの「可能性」は元の動詞があらわす行為にとってその対象が適切であるかどうかにもとづいている（Moreira 2014）。前者は可能か不可能かの二分的だが，後者は（26b）で *very* が形容詞を修飾していることからもわかるように，段階性をもつ性質だといえる。さらに，前者の可能性の意味は動詞と接辞 *-able* の意味 ‘can be V-ed’ から構成的に導かれるのに対して，後者の価値判断の意味は，それだけでは説明できない。Bisetto（2009）は，同じような多義性がイタリア語の接辞 *-bile* が付いた形容詞に見られることを指摘し，

価値判断をあらわす形容詞については，元の動詞の目的語である名詞の意味構造（Pustejovsky 1995のクオリア構造）を使った分析の可能性を示唆している。たとえば，*la pasta é mangiabile* ‘the pasta is edible’ では，目的語であるパスタはもともと食べるためのものなので，その性質として *mangiabile*「食べられる」という文字通りの可能性をあらわす必要性は認められない。そのため，この表現が意味をもつために価値判断「食べるに値する」という解釈になるということである。このように，本来は客観的な事実をあらわす *-able* は，文脈によっては主観的な意味をもつといえる。

接辞 *-able* は多くの心理動詞にも付加することができ，その場合に派生される形容詞は，主観的な判断をあらわす。

（28）a. We like the new teacher. → The new teacher is likeable.
b. We adore the baby. → The baby is adorable.
c. We regret the mistake. → The mistake is regrettable.
d. We desire a quick response. → A quick response is desirable.
e. We pity the losers. → The losers are pitiable.
f. We detest liars. → Liars are detestable.
g. enjoy → enjoyable, admire → admirable, respect → respectable,
love → lovable, deplore → deplorable, prefer → preferable

これらの心理動詞から派生する形容詞には「可能性」の意味は存在しない。たとえば，（28a）の *likeable* は，「（先生を）好きになることができる」という意味ではなく，先生に対して「好きである」という感情あるいは判断が存在することをあらわしている。ロマンス系言語や英語の動詞派生形容詞を取り上げてこの点を考察している Oltra-Massuet（2013）と Moreira（2014）は，これらの接辞が行為や変化をあらわす動詞に付くときには可能性（potentiality）をあらわすのに対して，心理状態や知覚などをあらわす状態動詞に付くときには可能性ではなく必然性（necessity）や義務（obligation）といった価値判断をあらわすと結論づけている。より具体的には，次のような対立である。[5]

5　Moreira (2014) の例はブラジル系ポルトガル語であるが，ここでは同じ趣旨を示す原著の英語訳の方を引用する。

（29）a. The vase is breakable, but it is not broken.

b. ??Mimi is lovable, but does not inspire love/affection.

(Moreira 2014: 192)

（29a）の *breakable* では，「壊れた（*broken*）」状態は将来起こりうる可能性にすぎないので，「壊れていない（*not broken*）」という後続文と矛盾しない。しかし，（29b）の *lovable* は，「愛情を引き起こさない」という文と共起すると不自然であることから，「愛されている」状態が含意されているといえる。Moreira のあげた例以外に，*adorable*, *regrettable*, *desirable* など上の（28）にあげた形容詞についても同じことが指摘できる。たとえば *regrettable* という形容詞は，遺憾の意を表明するときに *"It is regrettable that ~"* という構文が使われるが，それはまさに後悔の感情がそこに存在することをあらわしているのであって，その可能性を示唆しているわけではない。

この英語の接辞 *-able* や類似するヨーロッパ言語の形容詞派生接辞が作る形容詞の特徴を，前節で見た日本語の接辞 *-asi* と比較すると次のようなことがいえる。まず，日本語の動詞のうち，接辞 *-asi* が付くことができるのは主に対象を「を」格の目的語としてあらわす動詞に限られ，これらは英語で経験者を主語としてとる *fear* タイプの形容詞と類似した格パタンを示すもので，意味が類似する動詞と派生形容詞のペアとしては次のようなものをあげられる。

（30）a. like ~ likeable, prefer ~ preferable / 好む ~ 好ましい

b. deplore ~ deplorable, lament ~ lamentable / なげく ~ なげかわしい

c. pity ~ pitiable / いたむ ~ いたましい

d. depend ~ dependable, rely ~ reliable / 頼む ~ 頼もしい

e. detest ~ detestable / うとむ ~ うとましい

f. desire ~ desirable / 望む ~ 望ましい，思う ~ 思わしい[6]

g. regret ~ regrettable / 悔ゆ（古）~ くやしい

h. envy ~ enviable / ねたむ ~ ねたましい

6 「思わしい」の意味は元の動詞から変化して，「望ましい」という意味で否定の文脈でのみ使われる（e.g. 結果が思わしくない，思わしい結果が出ない）。

日本語の接辞 *-asi* が付く形容詞は，経験者が対象について抱くある感情や価値判断を引き起こすという性質をあらわすが，その性質はすでに実現しているという点で，英語の *-able* が付く形容詞と似た特徴を示すといえる。たとえば，「好ましい」は，経験者に対して対象を好むという心的状態を引き起こす性質と言いかえることができるが，上で英語の *lovable* や *regrettable* について見たのと同じく，「好む」という心的状態は可能性ではなくすでに存在するものだといえるのである。

統語的な特徴としては，どちらの場合も他動詞の目的語を主語に取り立てて，その属性をあらわす形容詞が作られるという共通点が見出される。これは，事象抑制によって外項が背景化された結果として属性叙述になっているという点で，Kageyama（2006）が指摘するところの態（ヴォイス）と属性記述の関係を示すものだと考えることもできる。英語の接辞 *-able* の生産的な用法である「可能性」の提示は，1 節でふれたように日本語では可能形であらわされるが，可能形の一部にも，次のように主観的な価値判断による属性記述が見られることも興味深い。

（31）a. この水は飲めますか。

b. この酒はなかなか飲める。

（31a）は寺村（1982: 259）が「受動的可能表現」と呼ぶもので，主語名詞の属性をあらわし，英語の「可能性」の意味をもつ *drinkable* または *potable* と同義だといえる。それに対して，（31b）は，「美味しい」という主観的な価値判断が加わった属性記述となっており，英語では（26）で見たように *drinkable* であらわすことはできるが，形態的に動詞派生であることが明らかではない *potable* であらわすことはできない（Moreira 2014）。

英語では経験者が目的語である *fear* タイプの心理動詞から接辞 *-able* による派生形容詞が作られるのに対して，もう一方の *frighten* タイプの心理動詞には *-able* の付加が一般的に容認されず（e.g. **disgustable*, **amazeable*, **puzzleable*），一部の例外が見られるのみだとされる（e.g. *irritable*, *annoyable*）。このことは，このタイプの心理動詞が受動態を作れないことと連動しているとされる（Landau 2010, Alexiadou 2018）。日本語でも経験者ではない方の項

を「に」格であらわす「戸惑う」などの動詞が受け身と接辞 *-asi* による派生形容詞の両方を作らない（* 戸惑われる，#戸惑わしい，cf. **puzzleable*）ことは大変興味深く，対象を目的語であらわす *fear* タイプや日本語の「好む」とは異なり，動詞のアスペクトについても状態ではなく状態変化をあらわすものが多い点で共通している。ただし，このタイプの心理動詞は日本語と英語で格パタンがまったく異なるので，その原因については統語構造と意味の両面からの説明が必要だと思われる。

５．まとめと今後の課題

本稿では，日本語の心理動詞と接辞 *-asi* によって作られる派生形容詞の特徴と，英語の接辞 *-able* が付加してできる形容詞の特徴を観察し，その動詞との関係や意味の特徴について考察した。英語の場合は，接辞 *-able* がその主要な用法で示す客観的な「可能性」の意味ではなく，目的語の性質や動詞の種類（心的状態をあらわす動詞）によって主観的な価値判断をあらわすのに対して，日本語の接辞 *-asi* の場合は，接辞本来がもつ主観性という意味特徴が動詞の意味と合わさった形で属性をあらわすと考えられる。

今後の課題としては，次のようなものがあげられる。まず，英語で心理動詞のうち状態をあらわすものが *-able* 付加が可能であるという観察に対して，対象を「を」格目的語としてとる日本語の心理動詞も多くが状態をあらわすと考えられるが，動詞によって「ている」が付きやすいものとそうではないものがあるので（e.g. 好む /? 好んでいる，嫌う / 嫌っている，望む / 望んでいる），この点については今後さらに検討する必要がある。また，4節で少しふれた形容詞の派生と態（ヴォイス）との関係についても，さらに考察を深めたい。

＜謝辞＞
本稿は日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究 (B)，課題番号17H02334）の援助を受けて行った研究成果の一部である。

参考文献

Alexiadou, Artemis. 2018. *-Able* adjectives and the syntax of psych verbs. *Glossa* 3(1): 74, 1-27. DOI: https://doi.org/10.5334/gjgl.498

Aronoff, Mark. 1976. *Word formation in generative grammar*. MIT Press.

坂東美智子・松村宏美. 2001. 心理動詞と心理形容詞. 影山太郎（編）『動詞の意味と構文』, 69-97. 大修館.

Belletti, Adriana and Luigi Rizzi. 1988. Psych verbs and theta theory. *Natural Language and Linguistic Theory* 6:291-352.

Bisetto, Antonietta. 2009, Italian adjectives in *-bile*. *The Annual Texts by Foreign Guest Professors*, Prague: TOGGA 2009 (ISBN 978-807308-2901)

Booij, Geert. 2017. Inheritance and motivation in Construction Morphology. Nikolas Gisborne and Andrew Hippisley (eds.), *Defaults in morphological theory*, 18-39. Oxford University Press.

Di Sciullo. Anne-Marie. 1996. X' selection. In J. Rooryck and L. Zaring (eds.), *Phrase structure and the lexicon*, 77-108. Dordrecht: Foris,

Grimshaw. Jane. 1990. *Argument structure*. MIT Press.

Landau. Idan. 2010. *The locative syntax of experiencers*. MIT Press.

Kageyama, Taro. 2006. Property description as a voice phenomenon. In M. Shibatani, T. Tsunoda, K. Kageyama (eds.) *Voice and grammatical relations: In honor of Masayoshi Shibatani*, 85-114. John Benjamins.

Moreira, Bruna Elisa da Costa. 2014. Two types of dispositional adjectives. *ReVEL Special Issue* 08.

Oltra-Massuet, Isabel. 2013. *Deverbal adjectives at the interface*. Berlin: Mouton de Gruyter. DOI: https://doi.org/10.1515/9781614510659

Pesetsky, David. 1995. *Zero syntax: experiencers and cascades*. MIT Press.

Pustejovsky, James. 1995. *The generative lexicon*. MIT Press.

Riehemann, Susanne Z. 1998. Type-based derivational morphology. *Journal of Comparative Germanic Linguistics* 2: 49-77.

杉岡洋子. 1992.「心理述語についての考察」『慶應義塾大学言語文化研究所紀要』第24号, 361-373.

杉岡洋子. 2007.「主観的事象表現と複雑述語形成」『慶応義塾大学言語文化研究所紀要』第38号, 21-43.

寺村秀夫. 1982.『日本語のシンタクスと意味Ⅰ』くろしお出版.

外崎淑子. 2005.『日本語述語の統語構造と語形成』ひつじ書房.

山崎馨. 1992.『形容詞助動詞の研究』和泉書院.